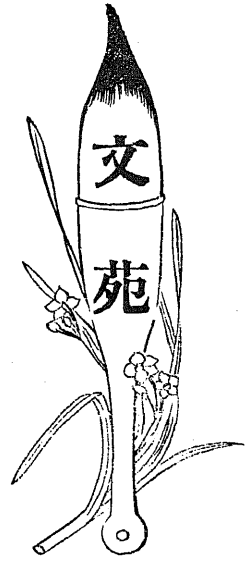

斯情と斯涙（子守學校卒業式）

長野　飯島八千溪

免狀も渡し、賞品も與へ、式は全く終った。五年生の一人の子守、列を排して、敎師の前に進んだ。滿場の視線は皆之れに集った。澁った聲で

「先生」

頭はガクリと前に垂れた。足元潤す涙數滴。此時イトやはらかな言葉で

「お前はどうしたの」

此言葉に勇氣づき

「永々お世話樣になりましたが、モウ今年は……」

震へた聲、とぎれ〳〵の其言葉。

「アノお前が……」

と云ひも終らずうなだれ、兩睫の潤ふも覺えず、暫時無言で有った……、ふと氣を取り直し

「お前はどうして下るの」

「ハイ今年いま一年お世話になりましたら、裁ち縫ふ事、讀み書く業も一通りは、未熟でも出來やうと、樂んで居ましたに……、先頃、國許の兩親から、今年は是非にかへれと……、親の言葉に從へば、朝夕先生に、敎へて頂くことが……、又先生に、敎へて頂かうとすれば、兩親の言葉に……、どうしたらよいかと、國許から手紙の來ました日から、朝晩只獨りで、隱に廻はって、涙に暮れて居るばかりで……」。

「アーアーお前は誠に、ういこじゃ……、お前は未だ

年も若く、先きも長いから、又修業の出來る折もあらうが、親は年も老い、先きも短かければ、一日も早くかへつて、よく孝行をするがよい……」。

「ハイ有りがとうムります……夫れでは先生、さう致しますから、どうぞ今迄通りに……何れ、ふだんの樣子は手紙で……」。

「アイわたしの方からも、亦度々」

「左樣ならお暇を……」。

「アー夫れでは、お前は之れで……。隨分身體を大事にして、女の道に背かぬ樣……」。

「ソンナラ皆さん」。

今迄二人の話に、頭上げかねし數十の子守、恰も堤の破れし如く、萬雷の一時に轟けるが如く、一度にワット聲あげて、

「アー花ちーやん」

と取り圍んで

「アーアー寒い時も暑い時も、かなしい事も嬉しい事も皆一所にしたものを、今日之れで……」。

オイ〳〵と諸聲に、前後も知らず泣き入ッた。

何の事やら無我無心の背中の乳子、アッケにとられてサッキにから、目をパチ〳〵あたりをキョロ〳〵見まはして居たが、やがて

「あねーお宿へ」

と二三回繰り返した、此聲に初めて己れに歸り、

「アーあねのめゝしい心から、ぼッちーやんに、お腹をおすかせ申した……、夫れでは、皆さんおさめで……」

「先生わたしどもが一所に送ッて……」

「オーさうとも〳〵……」

お花は今や、數十の守に擁せられ、一同しほ〳〵と校門を出でた、足音遠くかすかになッた。